



日本学校カウンセリング学会
Japanese School Counseling Association
学会・研修会（第30回大会）プログラム
（共催 財団法人 生徒指導士認定協会）

学校現場で具体的に確実に使えるカウンセリング、生徒指導を提案している学会です。
児童生徒を効果的に指導したい、さらに高度の指導力を身につけたい、具体的な指導が知りたい、また自信のある指導をしたいとお考えの方に最適です。

期 日 平成 27年1月10日（土）

場 所 アスト津
〒514-0009 三重県津市羽所町 700

参加対象 幼・小・中・高・大の教員、教委・研究所・センターの先生、学校心理士
・生徒指導士・臨床心理士・スクールカウンセラー、その他

参加費 4000円
学校心理士ポイントA、生徒指導士及び学会認定ポイントは1pとなります。

内容

口頭発表・講習会

受 付 9：00～ 9：15

午前 口頭発表 9：15～ 12：05
昼食

午後 講習会 13：00～ 15：00 **学校心理士 A 該当研修会です。**

講師 定金浩一先生 大阪産業大学准教授
(元兵庫教育大学大学院非常勤講師)

演題 「生徒指導事案における校内・校外連携」
—アスペルガー症候群の生徒の事例から—

生徒指導事案はどこの学校でも起こっています。また、生徒指導事案も学校だけで対処が難しい事案が増え、専門機関との連携がますます必要になってきています。そして、対応がうまくいかないと大きな問題になっています。今回は、個人が特定されないように、実際に起こった複数の生徒事例を基に構成した例を提供し、どのような対応をすれば良かったかを皆さんと共に検証してみたいと思います。

教育セミナー 15：10～16：10

講師 石川真史先生 三重県立聾学校教諭

演題 **アセスメントの読み取り方**
—WISC（ウイスク）を中心に—

今回は、心理検査の中でも一般的なWISC（ウイスク）を例に上げて考えたい。検査を実施するには各段階があり、検査の実施方法、得られたデータの処理方法、解釈の付け方、そして指導への活かし方と抑えなければならぬ段階がある。今回は、後半部分を中心にケースを見ながら、どのように検査結果を見ながら、指導へ生かして行けば良いかを考えたい。しかし、初心者の方へも理解して頂くために検査の目的や構造なども簡単に触れたいと考える。数値だけで判断するのではなく、実際の検査結果の何を大切にしていけば良いのかを抑えることができたらと考える。

口頭発表

「カード方式による『何でもバスケット』で中一ギャップを予防する」 構成的グループエンカウンターを試み」

9:15～9:45 30

分

奥村 桂子 (愛知教育カウンセリング研究会役員)

中一ギャップを乗り切る道徳」と題して、1年間に6個の道徳授業を行った。その中にエンカウターのエクササイズ『何でもバスケット』をカード方式で行う授業を2種類取り入れた。本日は、その授業のねらいや方法などを発表し、使用したワークシートを紹介する。

「アメリカにおける学校でのPBISとは何か」

9:45～10:00 15分

福井 龍太 (茨城県立医療大学)

P B I S (ポジティブ生徒指導)がアメリカの全州の19000に達する小学・中学・高校においてスクールワイドの形で実践され始めている。まず、P B I Sが生まれてきたアメリカの教育改革の歴史を振り返る。そして、P B I Sによる指導システムがどのような特徴を示すのか。その教育改革の持つ今日的な意義を、実際のアメリカの学校での実践を交えて紹介する。

「米国のPBISシステムを活用した開発的生徒指導実践」

10:00～10:30 30分

松山 康成 (大阪府寝屋川市立東小学校)

現在アメリカの学校現場で取り組まれている生徒指導システム「PBIS(Positive Behavior Intervention and Support:肯定的な行動への介入と支援)」の第1層支援を参考に、日本の学級で、子ども同士で取り組めるプログラムを試行的に開発し、実践したものを報告する。PBISにおける第1層支援とは、教師が子どもの行動をカードの配布によって認め、良い行動を強化していくというものである。

休憩

「発達障害が疑われる不登校生徒への進路支援

ーガイダンスルームを居場所としてー

10:35～11:05 30

分

定金 浩一 (大阪産業大学)

不登校のなかで急に学校に来なくなり、また急に学校に来るといった児童・生徒が少し存在する。このような児童・生徒は、「行かない」と決めるとなかなか動かないが、「行く」と決めると容易に学校に行けるタイプで、発達障害が疑われる場合が多い。

今から10年ほど前に、発達障害が疑われるこのようなタイプの生徒の進路支援を行った。この生徒の進路支援から、このようなタイプの児童・生徒を再度不登校にさせない方策を検討する。

「不登校を激減させた方法」

11時05～12時05 60分

工藤 弘 (安曇野市三郷小学校)

まず専門家による検討によってアンケートを作り、それを利用して尺度「S U T E K I」アンケートを作成した。それによって、児童生徒の不登校原因を明らかにした。分析結果から、教師の協力体制を整え、さらに不登校から救い出すプランを打ち出し、そのプランによって、児童生徒を導いた結果、不登校児童生徒を弁別し、不登校児童数を激減させた。引きこもり以外を不登校から(欠席30日以内)救い出す結果に導いた。別の小学校でも同様に不登校を激減させた方法。

※大会または発表に関するお問い合わせは、日本学校カウンセリング学会事務局のメールにてお願いいたします（office.jsca@gmail.com【西口利文】）。